

博物館、記憶、そしてアフロ系エクアドル人の アイデンティティ

ジョン・アントン・サンチェス／山本 誠・訳

「我々アフロ系エクアドル人の集団的な記憶と歴史をとりもどすこと、それは我々自身の現実と思考から我々の言説をつくりあげることに他ならない」¹⁾

【要約】

この試論はエクアドルの博物館に示されているアフロ系エクアドル人をめぐる表象を分析するものである。エクアドル中央銀行博物館を検討することにより、アフロ系エクアドル人のアイデンティティがネーションの公的な記憶を表象する博物館空間からいかに意図的に排除されているのか、このことを提示してみたい。アフロ系エクアドル人社会が集団的な動員と行動を通じてレイシズムと排除に対する闘争を開始した現在の状況からすれば、こういったテーマはますます重要なものになってきているといえるだろう。その闘争において、彼らはエクアドルの文化と歴史の中で自らにふさわしい空間を要求している。アフロ系エクアドル人の文化も加えるという中央銀行博物館の構想はどのようなものだろうか？またエクアドルというネーションの構築に貢献してきた彼らにふさわしい博物館の解説はどのようにすればよいのだろうか？

キーワード：博物館、アフロ系エクアドル人、アイデンティティ、記憶、アフリカ出自の文化、エクアドル

【Abstract】

This paper analyzes the way in which museums in Ecuador represent Afro Ecuadorian culture. In studying the museums of the Banco Central del Ecuador, it is shown how the Afro Ecuadorian identity is deliberately excluded from museum spaces that represent the official memory of the Nation. This topic becomes even more important at times when the Afro Ecuadorian society, by means of collective mobilization and action, battles racism and exclusion. In that battle the Afro Ecuadorians try and reclaim a space where their culture and history can be adopted into the Ecuadorian culture as a whole. This article answers two questions: The first being, what proposals and policies do the museums of the Banco Central del Ecuador have in regardsto the inclusion of the culture and history of the Afro Ecuadorian's? Secondly, how can a suitable museum narrative be implemented in relation to the contributions of the Afro Ecuadorian's in the construction of the Ecuadorian nation?

Keywords : Museums, Afroecuadorians, Identity, Memory, Afrodescendant Culture, Ecuador.

この試論で議論されるのは、エクアドルの博物館が行っているアフロ系エクアドル人の表象についてである。中央銀行博物館がアフロ的なアイデンティティをその展示においてないがしろにしているありさまを検討することで、公的な記憶という厳粛な舞台から彼らのアイデンティティがいかに意図的に排除されているか、そのことを提示してみたいと思う。こういったテーマは、アフロ社会が集団的な動員と行動を通じてレイシズムと存在の隠蔽に対する闘争を開始し、自分たちは多様なエクアドルの文化・歴史空間からネーションの構築に寄与してきた主体ではないかと抗議の声をあげ、公的な空間においてしかるべき場を要求するようになっていくことからすると、より一層重要なものになってこよう。

この試論では次のような疑問に答えてみたい。つまり、エクアドルの中央銀行博物館によるアフロ系エクアドル人の包摂という点において、多文化・多民族国家/複数エスニックネーション (*nación multicultural y pluriétnica*) というプロジェクトはどのように表象されているのだろうか。アフロ系エクアドル人に関する解説は提供されるのだろうか。仮にそうだととしても、それはどのようなものになっていくのだろうか――

【博物館でアフロ系エクアドル人の痕跡を求める】

博物館とは記憶を保存する制度として定義される。それは人々のアイデンティティと歴史をめぐる特権化された舞台である。また博物館は政治的な重要性もになっており、国家によるナショナルなプロジェクトとも密接な関係をもっている。それは国民/ネーションにとってある種聖地のごとき存在である。ピエール・ノラの解釈からすれば (Pierre 1986)、歴史的な資料館の類は現在にとっての「記憶の場」といえるのかもしれない。

こうした議論をふまえ、私は一般の入場者としてエクアドル内の博物館をいくつか、キトの中央銀行のそれを中心に訪れてみた。その博物館訪問の際、気になっていたのはアフロ系エクアドル人がどんな風に表象されているのかということであった。エクアドル憲法の次の条文――「エクアドルは複数のエスニック集団をもつ文化多元的な国家である」――が反映されているかどうか知りたかったのである。私の好奇心は憲法の第83条を下敷きにしたもので、そこには先住民と黒人、もしくはアフロ系エクアドル人もエクアドル国家の一部を形成するとある。さらに第62条には明確に次のことが定められてる。「国家は文化の平等性という原理にもとづき、文化間の相互交流を促し、その方面の政策を推進し、制度面の整備を行うものとする。」

エクアドルには102にのぼる博物館が存在する。その多くはエクアドル全体を対象とするナショナルな性質を帯びたものだが、よりローカル色の強い博物館もある。またいくつかの博物館はエクアドル中央銀行の出資をうけている。その102館の中にはあらゆるタイプの博物館が、たとえば民芸品関係や宗教、考古学、フォークロア、近代アート、民族学、キト市、先住民、航空機、音楽、地質学、動物学、古生物学、さらにはヴァーチャル博物館まで存在している。とはいえ、私が関心をもっているテーマとの関連では、次にあげる博物館でしか見るべきものがなかった。つまり、わずかな分量であれ、キトのミタ・デル・ムンド民族学博物館やキト市博物館、クエンカとエスメラルダスにある中央銀行博物館でしか、アフロ系エクアドル人に関する展示がなされていなかったのである。

エスメラルダスの中央銀行博物館には奴隷の売却に関する書類が収蔵されている歴史資料室があり、そこには1742年から1913年にわたってインバブラ、キト、チョタ溪谷、エスメラルダスで作成された登記台帳が117のファイルに収められている。こういった資料は国立歴史資料館からもたらされたもので、それぞれ古文書学的に転写されたものである。またアフロ系エクアドル人の伝統に関する口述による証言が収められたスライドやビデオ、映像フィルム、カセットで構成された「エスメラルダスの過去」という映像コレクションにも際立つものがあった。

クエンカの博物館にはエスメラルダスのアフロ系音楽に関する展示室があり、そこではフォークロア色の強いマリンバ楽団のロウ細工が存在感を発揮していた。キト市博物館では、著名な油彩作品「エスメラルダスの黒い族長」（アンドレス・サンチェス作、1599年）の複製を目にすることができた。この作品は16世紀、アロンソ・デ・イリエスカスによりキトに派遣された使者が王権を表す衣裳と金製の先住民装飾品を身にまとった姿で描かれているものだ。なお、オリジナル作品はマドリッドのアメリカ博物館に収蔵されている。

キトの西7kmに位置するミタ・デル・ムンド市には中央銀行の民族学博物館があり、エクアドルのネーションを構成する総計21のエスニック集団に関して、簡単なものだがフォークロア的な展示がなされている。その中にはエスメラルダスとチョタ溪谷のアフロ系エクアドル人に関するものも見うけられた。

しかし、私が最も興味をそそられたのは首都キトの文化センター（Casa de la Cultura）内にあるキト国立中央銀行博物館であった。そこには博物館用に6つの部屋が用意されているにもかかわらず、アフロ的なテーマにふれている部屋はひとつも見あたらなかった。それどころか、入口におかれていたヴァーチャル展示ケースでは、次のような解説を確認することになったのである。

リンク：民族誌

リレーション：エスメラルダスとチョタ溪谷のアフロ系エクアドル人

エスメラルダスのアフロ系エクアドル人：

「このエスニック集団はエスメラルダス県に居住し、その大多数は農村部で暮らしている（…）。社会組織のモデルとしては、核家族のモデルがより拡大されたレベルでも基本となっている（…）。農村部では、男女関係が安定していないのが普通である。母親は人生全般にわたって多様なパートナーをもつことがある。男性は家庭の維持、扶養について協力するが、いったん関係が壊れてしまうと子どもたちの養育は二次的なものになってしまう。核家族の内部でも、男性、女性の性別役割については定まった序列が存在する。父親とその息子たちは食卓を前に椅子に座って食べる一方、妻と娘たちは台所の床に坐って食べるのである…」

「アフロ系エクアドル人：彼らは特殊な社会文化的集団のひとつとして理解することができる。というのも、この集団は特殊な混淆の形態、つまりアフリカ起源という象徴的な要素を軸として、その上にスペイン的、先住民的な要素が取り入れられていくという混淆の形態にもとづいて成立しているからである（…）。その一方、彼らは17世紀にエスメラルダス沿岸で船が難破した際逃亡した奴隷たちの子孫だとされる集団でもある」（2005年5月12日および13日に訪れたキト中央銀行博物館内の解説文より）。

【博物館：覇権的な記憶とオルタナティブな記憶、両者のせめぎあい】

この国立の博物館に付されているアフロ系エクアドル人の解説、これが気になるのは情報が不正確だという理由からだけのことではない。上記のような表現がアイデンティティを想像する際に喚起するであろう政治的な影響力を懸念してのことでもある。エドアルド・キングマンとミレヤ・サルガドは次のように明確な指摘を行っている。「博物館とは記憶をつくりだし、それをあらためて反転させる特殊な制度である。そして記憶とは想像の世界を構築する上で重要な役割を果たしており、アイデンティティは想像によって構築される。」（Kingman y Salgado 2000:124）では、公開されている文面から判断する限りでいって、この博物館はアフロ系エクアドル人についてどういった表象を与えようとしているのだろうか。

その疑問に答えることは、博物館の役割、つまり展示という形でひとつの政治的言説を具体化し、そして特別なコンテキストでは権力関係を明確化することにもなる博物館の役割を理解することにつながってくる。エリザベス・ヘリンによれば（Jelin 2001:100）、博物館とは記憶の標識となるものを選択的に固定しようとする存在であり、しかもそれはひとつのイデオロギーを——ナショナルな歴史とアイデンティティに関する覇権的な見方を——肯定する形でなされる。そして多くの場合、その標識は勝者の記憶にだけ対応していて、敗者や被抑圧者のオルタナティブな記憶は排除されている。

こうしたことからすれば、国立の博物館がその解説文でアフロ系エクアドル人に関して彼らは従属的であり特殊な存在だというイメージを提示しているのは理解できないことではない。とはいいいながらも、この解説文は不正確でもある。まず第1に、「大多数は農村部に暮らしている」と断定しているが、2001年の国勢調査ではまったく逆のことが裏づけられている。つまり、アフロ系の68.7%は都市居住者であり、農村居住者は31.3%にすぎない（Secretaría Técnica del Frente Social 2005:28）。また解説文ではアフリカ起源の文化的遺産を受け継いでいることから特定のエスニック集団としての固有性は否定され、「特殊な混淆の形態」がことさらに強調されていた。その上、この博物館は歴史的な事実性についても正確さに欠けるところがある。エスメラルダスでの難破エピソードは、当時ミゲル・カベリョス・デ・バルボア司祭が語っていたことで、17世紀のことだとされているが、実際にその難破が起こったのは1世紀も前の1553年10月の出来事なのである（Savoia 1992:30）。

さらに、アフロ系エクアドル人の社会を未開なもの、能力に欠けるものだと位置づけていたことにも厳しい批判を加えることができるだろう。というのも、解説文では「アフロ系エクアドル人の男女関係は不安定である」と断定しており、男性は子どもたちの養育に無責任で、女

性の方もしっかりした家庭をつくる能力がないとされていたからだ。おまけに「父親とその息子たちは食卓の前に椅子に座って食べる一方、妻と娘たちは台所の床に坐って食べるのである」とまで書かれていたことについては、何をか言わんやである。

以上のことから、ひとつの結論、メアリー・ロルダンの次のような言葉に示される結論を得ることができるだろう。「ネーションの記憶を収める容器としての博物館は、そのネーションとアイデンティティの物語をつくりあげ、同時に広めていく役割を果たしている。」(Roldan 2000:103)そして博物館はそういうものとして特定の歴史観を具体化して示している。しかも、その歴史観は多くの場合覇権を握るエリートの立場からのものでしかない。実際、各種の展示やコレクション、解説、案内ガイド、パンフレットなどの情報は、多くの場合、政治的なニュアンスを含んだ立場から、中心的なものと同期的なもの、価値あるものと不要なもの、認められるべきものと周縁に追いやられてもかまわないものなどを規定することによって、ネーションの現実を描写したり序列づけたりしようとしているものだ。それゆえ、博物館はつまるところ対立の場、せめぎあいの空間であり、記憶や過去の解釈、歴史の評価、文化的アイデンティティをめぐる物語の構築と強化といった多様な観念があらためて定義される場所なのである。

この国立中央銀行博物館でのアフロ系関連の空間が気になっていた私は、館長のマリア・デル・ピラル・ミニョ博士と面会し、当の博物館ではどのようにアフロ系エクアドル人を扱っていくつもりなのか、インタビューを試みた。

- ・ミニョ館長：「当博物館では、黒人に関する展示を見ることはできません。展示するものはありませんし、あらゆるものを展示できているわけではないのです。確かに、当博物館にとって不名誉なことです。(アフロ系エクアドル人の)文化財を保有していないということは」
- ・A.サンチェス：「だとすると、その状況を改善するために、どんなことが考えられているのですか？」
- ・ミニョ館長：「当博物館の新館が完成すれば、もっと場所も広くとれますし、新たな構想のもとで展示室も新たにつくれます。そこでなら、我々のアイデンティティに関係するすべてのものを展示できるようになるでしょう。それが我々のやろうとしていることなのです」
- ・A.サンチェス：「その新しい構想とは、どのようなものですか？アフロ系エクアドル人はどんな風に展示されるのですか？彼らのためにひとつ部屋が用意されるのですか？」
- ・ミニョ館長：「つい最近、観覧全体についての枠組構想ができあがったばかりです。そこでは歴史的な時代ごとに展示してはどうかというアイデアが検討されています」
- ・A.サンチェス：「その中で、アフロ系エクアドル人の歴史についてはどのように考えられているのですか？」
- ・ミニョ館長：「そこまでおっしゃるなら、サンティアゴ・オンタネダ博士に聞いてみるのがいいでしょう。彼がこの構想の責任者ですから。彼に連絡してみませんか？」²⁾

そこで、当のサンティアゴ・オンタネダ氏に新博物館でのアフロ系エクアドル人の展示について尋ねてみると、次のような回答が返ってきた。「どういうものにするのか、はっきりした

アイデアがあるわけではありません。ごく最近動きはじめたばかりなので。ただ、あなたが提起してくれた問題はとても重要なことなのかもしれません。実際、彼らのことはあまり世間に知られていませんからね。」³⁾

国立の博物館でアフロ系エクアドル人を妥当な形で表象、展示するというテーマは、アフロ系の人々にとっても重要な戦略的ことになってきている。ネーションへの包摂と参加という問題の解決につながるからだ。その一方、妥当とはいえない表象がなされることになれば、排除と従属という問題がより深刻化することにもなりかねない。問題はアフロ系の人々の記憶とアイデンティティを強固なものに鍛え上げていくことであり、エクアドルというネーションを表象する公的な空間においてひとつの場を占めることである。こういったコンテクストをふまえ、アフロ系エクアドル人の社会運動における指導者ホセ・チャラ・クルスは次のように述べている。「我々の諸コミュニティは集団的な記憶と歴史をとりもどさなければならない。それは我々自身の現実と思考から我々の言説をつくりあげることに他ならない。記憶を失うことは自意識の喪失を意味するのである。」⁴⁾ この証言こそ、アフロ系エクアドル人にとっての課題を指し示すものである。いわば歴史において可視的な存在となるよう自ら心血を注ぐこと——公的な歴史を見る限りでは、これまでずっと周縁に追いやられてきたわけだから。このことに関連して、ノーマン・ホイットンも、アフロ系エクアドル人は著しく劣った存在として、先住民よりも劣った存在として、エクアドルのエリート層に受けとめられてきたと記述している (Whitten 1981:17)。さらに、カルロス・デ・ラ・トーレも、エクアドルというネーションをめぐる知識人たちの考察において、アフロ系の人々はひとつの問題として、つまり、いかにして彼らを文明世界に導き入れていくか、その問題の枠内でしか考えられなかったと指摘している (de la Torre 2002:19)。この論点をはっきり示すため、デ・ラ・トーレはアルフレド・エスピノサ・タマヨ (1916) やアントニオ・サンティアナ (1955)、そしてウンベルト・ガルシア・オルティス (1935) といった知識人の立場を再検討しているが、彼らはアフロ系エクアドル人について「自然の領域の一部であり、文明文化に欠け、文明世界に導き入れるには最も不適格な人種だとして」描写していたという。

【記憶と歴史の回復】

アフロ系エクアドル人の集団的な歴史的記憶をとりもどそうというホセ・チャラの呼びかけは、諸コミュニティのアイデンティティをかけた動員を行う上で、ひとつの重要な資源になっている。そして、このことのより明確な事例として、コロンビアの太平洋沿岸部をあげることができる。そこでは1993年の第70法で認可された集団的な権利を行使する一環として、アフリカ出自の人々がテリトリーをめぐる歴史的な記憶の再構築とアイデンティティの捉え直しに向かっているのである。

この歴史の再構築プロセスをめぐって、マヌエル・オリベリャはアフリカ人にとっての「奴隷制」のもつ重要性、影響力の大きさを分析している (Zapata 1989)。奴隷制という現象はアイデンティティの根幹に暴力的な形で亀裂を生じさせるもので、全面的な記憶の再構築を強いるものである。その奴隷制のプロセスにおいてアフリカ人たちは記憶の痕跡となるような物質

文化をアメリカ大陸にもちこむことなく、ただ裸の身体だけを保持してきた。その裸の身体こそが、後になって文化表象の生きた空間、ジェニファー・シマーのいう「記憶の貯蔵庫」(Schimer 1994) になっていくのかもしれない。

奴隷制という悲劇にもかかわらず、アフリカ出自の人々は新たな記憶を創造してきた。それは吟遊詩人グリオ (*griots*) により語られる物語がきわめて重要な役割を果たすような、そんな場で使われる方法を介してのことである。そういった口述による語りを通じた記憶の構築はジャック・ル・ゴフにより「記憶の生成的再構築」(Le Goff 1991:153) と呼ばれており、それは口述による語りが自由かつ柔軟な形で歴史的メッセージを伝達するというものだ。このような口述による歴史と記憶の関係はアレクサンドロ・ポルテリにより研究されており、彼の理解では、その口述による歴史は人々の記憶を維持するひとつの技芸 (*arte*) だということになる (Portelli 1991)⁵⁾。

ただし、記憶の構築といっても、そこには隙間や空白、忘却も入りこむ。ルイサ・パッセリーニは、記憶にとどめるという行為には、往々にして忘却するにまかせることも含まれると述べている (Passerini 1992)。おそらくそれはトラウマ的なもの、あるいは現在に引き戻すにはあまりにも辛すぎるような出来事のことである。この点について、オダイル・ホフマンは次のように述べている。コロンビア海岸部のアフロ系コミュニティの中には「奴隷制に関する局面は人前で口にされる記憶からは消失してしまっただころがある。屈辱と苦しみを消し去ろうとする集団的健忘症ということだ」(Hoffman 2000:99)。では、その奴隷制は実際のところアフロ系の人々の記憶から消え去ってしまったままなのだろうか？このことについて、エリザベス・ヘリンは忘却のない記憶など存在しないと明確に述べている (Jelin 2002)。またパロマ・アギラルは、記憶の沈黙はトラウマによる沈黙ということであり、それは完全に忘却してしまったことの反映というわけではなく、時と場合に応じて記憶を使用するまた別の形態なのだと言っている (Aguilar 1996)。

記憶というものは、歴史上異なる時期に異なる使い方がなされてきた (Le Goff 1991)。それゆえ記憶とは特定の政治的状况に応じて柔軟に変容していくプロセスだということは押さえておかなければならない。さらに「記憶はなんら忘却と対立するものではない。忘れてしまったり覚えたままだったり、その相互作用がずっと続いていくものだ」(Todorov 1997:15)。だとすれば、記憶とは保持されてきた出来事や過去のある一面が何ほどか選択されたものであり、選択されなかったものは捨て去られてしまっている、そういう理解をすべきだということになる。アフロ系の人々にとって、あの奴隷制というトラウマにもとづく沈黙は深層のレベルでは忘却などできないのではないだろうか。むしろそれはプライベートな記憶や意識、そして多くの場合には身体の内秘に隠されて、その身体に刻まれた刻印やアフリカからの移動という事実の中にすべての過去を封じ込めているのではないだろうか (Stuart Hall 1997)。アフリカ出自の人々には詩や神話、リズムとダンス、通過儀礼、ちょっとしたアフリカ的な言葉づかい、口承の物語、死生観などが歴史的かつ集団的な記憶の場所として、いわば「かたみ」(*mementos*) として維持されており、そういったものがアイデンティティ構築の上で重要な政治的コンテキストにおいて、社会的な諸関係とのかねあいにより意識的、無意識的に浮上してくるので

ある。

【政治的言説としての集団的記憶】

現在、アフリカ出自の人々にとって歴史的、集団的な記憶の回復というテーマは政治的な言説の中で利用可能な道具になってきている。集団的な活動の場でも彼らは文化的に自らを強固なものにしていく戦略として「記憶の利用」という手段に訴えている。それだけ文化と記憶は密接に結びついているのである⁶⁾。したがって記憶というテーマはアフロ系エクアドル人による組織的な展開において常に政治的なアジェンダにのることになる。たとえばエスメラルダス県北部の組織にとって、記憶とは「先祖的なもの」であり、文化的な遺産を——その多くは失われてしまったとはいえ——伝えてくれた先祖（アフリカの「先人たち（“mayores”）」）のルーツに関わることである。それゆえ、エスニック教育、あるいはエスノヒストリーに関するワークショップなどでは、彼らのアソシエーション的組織が次のような挑戦的な問題提起を行ったりすることもある。つまりリンガラ語などのアフリカ諸語の復活やアフリカの衣裳やシンボルを使っていくこと、ヨルバ系の宗教を実践すること、アフリカ人としての固有の名前に改名することなどである。こういう本質主義的な記憶回復の発想がアイデンティティ形成上の教科書のごとき扱いを受けているぶん、真正性や起源の問題以上に「先祖的なもの」もイデオロギー的な意図を含んだ創出物だということは視野に入っていない。テレンス・レンジャーとエリク・ボブズボームは創出された伝統について語っているが、そこでは「先祖的なもの」もある社会が一定の歴史的現在においてつくりあげた文化的構築物として理解すべきだと述べられていた（Terence 2002）。この観点からすると、記憶とはひとつのデータベース、つまり人々の生活を支える世界の条件が変化するのに対応していくため、不断に再創出されつづけなければならないデータベースに相当するものだということになる。

【アフロ系エクアドル人博物館という問題提起】

アフロ系エクアドル人自身による記憶の再生プロセスにおいて、博物館という論点はより一層その重要性を増している。それは様々な記念日や歴史的な日付、その他記憶の標識となるようなものごとがアイデンティティの形成プロセス、社会的包摂の言説において重要な要素になっていることと同様である。また博物館は、より具体的には国立中央銀行博物館は、エクアドルというネーション内に多数居住しているエスニック集団の文化的遺産を——デヴィッド・ローウェンサルが「文化の民主的プロセス（Lowenthal 1994）」と形容したコンテキストにおいて——しっかりと守ることをその中心的な目的とすべきであろう。つまり、博物館は国家の今日的な現実に対応していかなければならないということだ。だとすれば博物館は次のような課題をもつことになる。つまり、ますます文化間の交流が増し、土地にしばられることがなくなり、グローバル化、多様化が進行する世界において、象徴的な次元で相互に交わされている数多くの申し立てを受け止め、理解するということである。現在の世界ではアイデンティティは完成された価値というわけではなく、絶えず入れ替わり、流動しつづけるものなのだから。

とはいえ、次のことは指摘しておかなければならない。博物館の側から文化的な多様性に向

けて道を開いていっても、場合によりそれはエドアルド・キングマンのいう「多様性の民主化」という表面的な言説 (Kingman 2004:31) のひとつになってしまう保証はない。つまり、劇画的なパロディ化につながりかねない文化振興や排除された人々の記憶の標識に関する実践、こういったものを引き受けるのは避けるべきだということである。多様性の包摂と対話という問題提起から、ビジネスとツーリズムのためにアイデンティティと文化遺産が飼いならされてしまうようなことが起こってはならない。とはいえ、グローバル化のプロセスが強いてくる状況や現代のありようを解釈できないようなラディカリズムやナイーブさも話にならないだろう。ここで問われているのは、多様性に道を開く制度の側からの文化政策というものは、表象の対象となる当の人たちの参加や合意、創造的な可能性に向けられているかどうかということである。

【考察：アフロ系エクアドル人の展示室に何を置くのか】

この試論を閉じるにあたり、私はアフロ系エクアドル人博物館の展示室に何を収めるべきなのか、予備的な形で大まかなスケッチをしておきたい。「予備的な形で」というのは、この場で本格的な検討、分析、調査に値するような提案を余すところなく述べてしまうのは、あまりにも分をわきまえないことのようにみえるからである。また、私の考えでは、こういう大きな問題提起をもくろむのであれば、それは広範囲なレベルで議論し、折り合いをつけ、合意を得ることが必要であり、どこであれ市民社会であるならば、どのように展示されることを望むのか、どのようなものが展示されなければならないのか、そしてそれはどのように展示されるべきなのか、それを提起するのはその同じ市民社会ではないか——そう思うからである。つまり、この問題提起は広い意味での民主的な参加を通じて練りあげられていかなければならないということである。さらに、アフロ系エクアドル人博物館もしくは展示室という問題提起をしようとするれば、資料調査や民族誌的調査、さらには考古学的な調査にいたる確固とした戦略をもっていなければならない。しかもそれは社会的な表象、記憶、文化的アイデンティティをめぐる広範な議論を喚起することで互いに補足しあう必要がある。

博物館展示室の提案は、次のような認識論的枠組の中に位置づけられるべきである。その枠組とは、アフリカ出自の人々がエクアドルというネーションをつくりあげる上でもたらしたものの、しかも歴史とフォークロアからだけでなく、政治経済や文学、その他文化的な領域からの貢献をも包みこむような枠組のことだ。その枠組のもとでこそ、博物館の入場者はクリフォード・ギアツが明確に述べていたようなものとして (Geertz 1987:17) ——エクアドルの世界だけでなく、ラテンアメリカ地域やグローバルなコンテキストといった複雑に錯綜する現実のありようにも意義を認めるような、大きなコンテキストそのものとして——アフロ系エクアドル人の文化を読みとることができるだろう。アフロ系エクアドル人の文化が孤立したものでない以上、彼らの文化はアフリカのディアスポラと呼ばれるグローバルな現象とは不可分だし、またアメリカ大陸の黒人や数千年におよぶアフリカ文化の主張といったグローバルな現象とも切り離すことはできない。それゆえ、博物館、または博物館の展示室ではエクアドルにおけるアフリカのディアスポラについての存在論と知見、そのグローバルな全体像を示さなければならない

いだろう。

そこで、まず最初に考えられることは、博物館の展示室はエクアドルにおけるアフリカ出自の文化に関する有形・無形の記憶を回復、再生させることを使命とすべきだということである。そのことにより、彼らの歴史は価値あるものになり、現在を理解し、実りある未来を展望することも可能になる。エクアドル国家からしても、そういった展示は差別やレイシズムとは無縁の包摂的なやり方でナショナル・アイデンティティをつくりあげていく上で、無視できないひとつの要素になりうるだろう。その土台はまさに人々のコスモロジーとアイデンティティ、その多様性に求められていくことになろう。

このようなことをふまえると、博物館の展示はアフリカの記憶が3つの舞台において際立っていなければならないはずだ。それはアフリカ、アフロ系アメリカ、そしてアフロ系エクアドルということになる。まずはアフリカの諸文明から始まって、その人類への貢献が、次には奴隷の辿った道筋が跡づけられ、大西洋を跨ぐ人身売買、植民地経済と資本主義への貢献が、そしてエクアドルにおけるアフリカの痕跡が示される。パレンケ（訳者註：スペイン領植民地の逃亡奴隷社会。植民地期ブラジルの「キロンボ」に相当する）の歴史という記憶にとどめるべき出来事、英雄とシマロン（逃亡奴隷）、独立に向けての戦闘や武勲、その中には解放者ポリバルの軍事遠征への貢献も含まれよう。アフリカ出自の人々の中で科学や芸術、文学、経済、学界・政界などでエクアドル国内、あるいは世界的に傑出した人物は強調すべきだろう。スポーツや音楽、手工芸品、ダンス、そして特にスピリチュアルな世界、宗教的な世界——死や呪術、治療——などについてはそれ専用の場を設定する必要があるかもしれない。

総論的なこととしては、アフリカから受け継いできたものごとを介して、エクアドルの文化をより一層知ることができるような博物館コレクションを提案しておきたい。反論というよりも疑問を抱かせ、議論、論争を喚起し、ネーションへの貢献についてまた別の見方を身近なものにさせてくれるような、そして特にこれまで隠されてきたこういう人々の記憶について創造的な形で内省することにつながるような、そんなコレクションを提案したいということである。

【註】

1. チョタ溪谷のアフロ系エクアドル人指導者、ホセ・チャラ氏の発言（2004年4月、アンブキで行われたエスニック教育ワークショップにて）。
2. 国立中央博物館館長、マリア・デル・ピラル・ミニョ博士へのインタビューより。インタビュー自体は2005年5月19日午前9時30分より、館長室にて行われた。
3. 中央銀行博物館新構想代表責任者、サンティアゴ・オンタネダ氏への電話インタビューより（2005年5月19日9時45分、キトにて）。
4. ホセ・チャラ氏の講演「集団的記憶とエスニック教育」における発言（2004年4月17日、チョタ溪谷アンブキでのエスニック教育ワークショップにて）。フィールド日誌より。
5. 口述の語りについてはブランカ・ムラトリオを参照（Muratorio 1987）。
6. T.トドロフによれば、文化とは記憶をめぐることがらとして理解しなければならないものだ。「文化とは行動に関する一定のコードについての認識であり、そのコードを使いこなす能力のことでもある。

そして文化なき存在とは、先人たちの文化をまったく獲得してこなかったか、それを忘却し、喪失してしまった者のことである。」(Todorov 1997:17)

* 訳者より：四天王寺大学紀要第46号（2008）以来、これまでエクアドル・アマゾンを中心とするラテンアメリカ関連の論文を3回にわたって計6本、訳出してきた（第46号の他、47号、48号を参照されたい）。この地域に関する日本語での情報の乏しさからすると、翻訳・紹介自体に一定の意味があるかと判断したからである。その際の論文選択の基準は①スペイン語で書かれていること（英語論文であれば訳出する必要性は薄いだろう）②比較的大きなテーマを扱っており、この地域の全般的な理解につながる論文であること、というものであった。

ただ、今回については、これまでの6本の論文とはやや趣が異なり、より限定的なテーマを扱っている論文を選択した（上記②の「この地域の全般的な理解」はこれまでの6本の論文紹介により、ある程度は達成したと考える）。アマゾン先住民の歴史性を扱った「よみがえるフマンディ」（マイケル・A・ウゼンドスキ）、そしてこの博物館における——本文中にも指摘があるとおおり、先住民よりいっそう周縁的な扱いを受けている——アフロ系エクアドル人の表象に関するものである。理解を助ける意味でも、四天王寺大学紀要第46号、47号、48号に訳出した論文とあわせて読んでいただければ幸いである。46号からの一連の翻訳の試みはこれでいったん区切りをつけることとするが、ラテンアメリカ地域に関する興味・関心が少しでも高まり、日本とラテンアメリカ、もしくは日本とエクアドルの相互理解に多少でも貢献することにつながれば、訳者としてこれ以上の喜びはない。

【参考文献】

- Aguilar, Fernández, Paloma, 1996, *Memoria y olvido de la guerra civil española*, Alianza Editorial, Madrid.
- De la Torre, Carlos, 2002, *Afroquiteños, ciudadanías y racismo*, Centro Andino de Acción Popular, Quito.
- Geertz, Clifford, 1987, *La interpretación de las culturas*, Gedisa, Barcelona.
- Hoffamn, Odile, 2000, “La movilización identitaria y en recurso de la memoria. Nariño, Pacífico colombiano” en Gnecco y Zambrano, editores, *Memoria hegemónica y memorias disidentes*, INCANH, Bogotá.
- Jelin, Elizabeth, 2001, “Exclusión, Memorias y luchas políticas”, en Daniel Mato, compilador, *Estudios latinoamericanos sobre cultura y transformaciones sociales en tiempos de globalización*, CLACSO, Buenos Aires.
- Jelin, Elizabeth, 2002, *Los trabajos de la memorias*, Siglo XXI, Madrid.
- Muratorio, Blanca, 1987, *Rucuyaya Alonso y la historia social del Alto Napo*, Abya- Yala, Quito.
- Kingman, Eduardo y Mireya Salgado, 2000, “El Museo de la Ciudad. Reflexiones sobre la memoria y la vida cotidiana”, en Fernando Carrión, compilador, *Desarrollo cultural y gestión en centros históricos*, Flacso-Ecuador, Quito.
- Kingman, Eduardo, 2004, “Patrimonios, políticas de la memoria e institucionalización de la cultura” en *Iconos, Revista de Ciencias Sociales*, No. 20, Flacso-Ecuador, Quito.
- Le Goff, Jacques, 1991, *El orden de la memoria. El tiempo como imaginario*, Paidós, Barcelona.
- Lowenthal, David, 1994, “Identity, Heritage, and History”, en *Commemorations: The Politics of Natural Identity*, John Gillies, Estados Unidos.
- Passerini, Louisa, 1992, *Memory and totalitarianism. International yearbook of oral history and life histories*, Oxford University Press, Oxford.
- Pierre, Nora, 1986, *Les lieux de memorie*, Gallimard, Paris.
- Portelli, Alessandro, 1991, “The death of Luigi Trastulli: memory and the events”, en *The Death of Luigi Trastulli*

- and Others Stories. Form and Meaning in Oral History*, State University of New York Press, New York.
- Roldan, Mary, 2000, "Museo nacional, fronteras de la identidad y retos de la globalización", en G. Sánchez y M. Wills, compiladores, *Museo, memoria y nación. Misión de los museos nacionales para los ciudadanos del futuro*, Ministerio de cultura, Bogotá.
- Sánchez, Gonzalo, 1999, "Memoria, museo y nación", Bogotá, mimeo.
- Savoia, Rafael, 1992, "El Negro Alonso de Illescas y sus descendientes (entre 1553 y 1867)", en Rafael Savoia, compilador, *El Negro en la historia del Ecuador y el sur de Colombia. Actas del primer congreso de historia del negro en el Ecuador y Sur de Colombia*, Centro Cultural Afroecuatoriano, Quito.
- Secretaría Técnica del Frente Social, 2005, *Los Afroecuatorianos en cifras. Desigualdad, discriminación y exclusión según las estadísticas sociales del Ecuador*, STFS, Quito.
- Terence, Ranger, 2002, "El invento de las tradiciones en el África colonial", en Eric Hobsbawm y Terence Ranger, editores, *La invención de la tradición*, Crítica, Barcelona.
- Todorov, Tzevan, 1997, "Los abusos de la memoria", en *Ciudad y memoria*, Corporación Región, Medellín.
- Zapata, Olivella Manuel, 1989, *Las claves mágicas de América*, Plaza y Janes, Bogotá.

【インタビュー】

- ・ María del Pilar Miño, Di rectora del Museo Nacional del Banco Central, mayo de 2005.
- ・ Santiago Otaneda, Coordinador general del nuevo guión del Banco Central, mayo de 2005.

原 題：Museos, memoria e identidad afroecuatoriana

原著者：Antón Sánchez, John (Antropólogo, estudiante del doctorado de FLACSO-Ecuador)

Email: afroecuatorianos@yahoo.com

出 典：Iconos, *Revista de Ciencias Sociales* no. 29. FLACSO, Facultad Latinoamericana de Ciencias Sociales, Sede Quito. 2007. (pp. 123-131)

[en línea] <<http://www.flacso.org.ec/docs/i29anton2.pdf>>